

---

# 「空虚な」記号としての代名詞

エミール・パンヴェニストにおける  
「話者」、「意義作用」、「現実」の問題をめぐって

---

KOYA Ryohci

小屋 竜平

## 1. 序

エミール・バンヴェニスト (1902-1973) が1939年に『アクタ・リングイスティカ』に発表した「言語記号の性質」(以下「言語記号」論文)<sup>(1)</sup>は、シャルル・バイイとアルベール・セシュエが編集し、1916年に出版されたフェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』(以下『講義』)における「言語記号の恣意性」に抗して、その「必然性」を主張し多くの議論を引き起こした論文として知られている<sup>(2)</sup>。

ところで、バンヴェニストは言語記号の「必然性」を主張する箇所で、「精神は空虚な形式、名指されていない観念を含まない」と述べているが、ここで現れる「空虚な(vide)」という語句に注目しながらバンヴェニストの論文群を読み進めていくと、1956年に発表した「代名詞の性質」<sup>(3)</sup>(以下「代名詞」論文)においては、この部分の主張とは対照的に、代名詞を「空虚な」記号として定義していることに気づく。つまりラング<sup>(4)</sup>のうちに「空虚な」記号を見いだすことは、バンヴェニストの代名詞の定義、またそれに結びつけられた「ディスクリールの審級=事例」に関係づけられながら、それらの問題を彼が取り上げる際に重要な前提となっていると考えられるのである。そうであるならば、1939年の論文においてはバンヴェニスト自身がその存在を認めなかった「空虚な」記号というものを、その後彼に見発せしめた条件とはいったい何であったのだろうか。本論文は、そのようなバンヴェニストの視座の変更を、「空虚な」という形容詞の使用をたどり直すことによって検証することを目的とする。その問題に取りかかるために、まず「言語記号」論文において、「精神は空虚な形式、名指されていない観念を含まない」という主張がどのように唱えられているのかを確認しよう。ついで、「空虚な」という語句がバンヴェニストの論文において他の箇所でも現れていることを確認したうえで、「代名詞」論文における「空虚な」記号を含むラングの現れが、いかなる問題設定に基づいていたものであるのかを考察する。ここでは「空虚な」という形容詞がバンヴェニストにおいて「話者」<sup>(5)</sup>と「意義作用」を巡る問題において用いられていることに注目しながら、39年と56年の論文とのあいだの「空虚な」という形容詞の用いられ方の違いは、それらの問題の問い直しに基づいているのではないかという仮説を検討してみよう。以上のような議論を通じて、「空

---

(1) Benveniste, Emile, « Nature du signe linguistique », *Acta linguistica*, n° 1 (1939), repris in *Problèmes de linguistique générale*, t.1, Paris, Gallimard, 1966, p. 49-55 (邦訳、岸本通夫監訳、川村正夫、木下光一、高塚洋太郎、花輪光、矢島 猷三訳『一般言語学の諸問題』みすず書房、1983年、55-62頁)。以下同書からの引用は、初めて参照する論文に関しては初出を明示した上で引用し、以降はPLG, 1と省略しその後に引用ページ数、邦訳のページ数を示す。また邦訳を可能なかぎり参考にしつつも適宜訳語を変更したことを最初に断っておく。

(2) ここではもちろんその全てを挙げるわけにはいか

ないが、丸山圭三郎氏の論文はバンヴェニストのソシュール読解を検討したものである。丸山圭三郎「シーニュの恣意性」『ソシュールの思想』岩波書店、1981年、296-313頁。また近年では、ソシュールの自筆原稿出版の編纂者の一人であるシモン・ブーケが、ソシュールの原資料に基づきながらバンヴェニストの読解を批判的に検討している。Bouquet, Simon, « Benveniste et la représentation du sens : de l'arbitraire du signe à l'objet extra-linguistique », *LINX*, numéro spécial (1997), p. 107-123.

(3) Benveniste, Emile, « La nature des pronoms », in

虚な」記号を巡るバンヴェニストの立場の変更は、一方では彼が言語外の「第三項」としての「現実 (réalité)」を言語学的方法としては徹底的に排除することを目指しながら、他方でそのような「現実」と必然的に関係づけられる「話者」や「意義作用」を、いかにして言語学の問題として取り扱うのかという課題と密接に結びついていることが確認されるだろう。

## 2. バンヴェニストにおける「空虚な」という用語の使用

### 2-1. 「空虚」な形式を含まないラング

さて「言語記号」論文におけるバンヴェニストの主張を簡潔にまとめるならば、それは次のようになる<sup>(6)</sup>。まずバンヴェニストは、『講義』において「記号」が「シニフィアン」と「シニフィエ」の連合から生じた全体として定義されている箇所を取り上げる。そこでは「シニフィアン」を「聴覚映像」、「シニフィエ」を「概念」として定義した上で、両者の間にはいかなる「内的連関」もないことが強調されている。そしてそのことは諸言語の間の差異によって説明されると『講義』には記されている。つまり「<牛(bœuf)>というシニフィエが、国境の一方の側ではシニフィアンとしてb-œ-fをもち、他方ではo-k-s (Ochs)をもつ」というその事実こそがまさに、「シニフィアン」と「シニフィエ」の間にいかなる連関がないことの証拠である。そこからバンヴェニストは、『講義』においてソシュールは『恣意的』という語によって、「記号<sup>(7)</sup>が無動機 (immotivé) である、つまりシニフィエとの連関において恣意的であり、シニフィエに対して現実におけるいかなる自然のつながりをもたない」<sup>(8)</sup>ことを主張していると述べる。

ここでバンヴェニストは、『講義』においてソシュールが「恣意性の原理」を導き出す上のような推論において、そこには最初には含まれていなかった「第三項」が密かに、そして「無意識」のうちに導入されていることを主張する。ここでバンヴェニストが取り上げるのは、「記号」は「シニフィエ」に対して「現実におけるどんな自然のつながりももたない」と述べられている箇所である。バンヴェニストはこの引用において、ソシュールが当初は「シニフィアン」と「シニフィエ」を、「聴覚映像」と「概念」として定義し、その二つの連関を「記号」と定義していたのに対して、ここでは

---

For Roman Jakobson, La Haye, Mouton, 1953, repris in *PLG*, 1, p. 251-257 (邦訳, 234-241頁)。

(4) 本論においては、langueを「ラング」、langageを「ランガージュ」としてカタカナ表記で記し、des languesという複数形で用いられた場合は「諸言語」という訳語を用いた。またlinguistiqueが形容詞として用いられている場合には「言語」と訳す。

(5) 本論においては、sujet parlantを「話し手」、locuteurを「話者」と訳し分ける。

(6) *PLG*, 1, p. 49-51 (邦訳, 55-57頁)。

(7) ここでバンヴェニストは『講義』の原文を引用しながらソシュールにおける「恣意性」の議論を辿り直

しているが、エゲが主張するようにバンヴェニストは省略を行いながら引用することで、ソシュールの議論を歪曲してしまっているとも考えられる。つまりバンヴェニストの論文においては、このソシュールの引用における« il »は明らかに「記号」に照応するのに対し、原文では「シニフィアン」を指すものとして用いられていると考えられる。原文では« Le mot arbitraire appelle aussi une remarque. Il ne doit pas donner l'idée que le signifiant dépend du libre choix du sujet parlant ( on verra plus bas qu'il n'est pas au pouvoir de l'individu de rien changer à un signe une fois établi dans

「シニフィエ」を「もの」もしくは「現実」として考えてしまっていることに着目する。このような「第三項」の導入はソシュールが定義した「記号」の性質に反するものであり、ソシュールが「恣意性」を唱えるときに、彼は「記号」と「実質」——「現実」としての「もの」——との関係を自らの立てた前提に矛盾する仕方でも導入してしまっていると、バンヴェニストは指摘するのである。

『講義』におけるソシュールの定義の読解を通じて、バンヴェニストはソシュールの述べる「恣意性」とは「記号」と「もの」との間にのみ観察できるものであり、それとは反対にソシュールの最初の定義に忠実になるならば、「シニフィアン」と「シニフィエ」の関係は「必然的」であることを次のように述べている。

記号の構成要素の一つである聴覚映像は、その記号のシニフィアンを構成するのに対し、他方で概念は、記号のシニフィエである。シニフィアンとシニフィエの間では、紐帯は恣意的ではなく、反対に、それは必然的である。＜牛＞という概念（「シニフィエ」）は、私の意識の中では、bœf という音声的な全体と、必ず同一である。そうでないことがあるだろうか？ それらの二つは私の精神に一緒に刻みつけられたのであり、それらはいかなる場合においても、一緒に喚起される。その二つの間には非常に緊密な共生があるので、＜牛＞という概念は、bœf という聴覚映像の魂のようなものである。精神は空虚な形式や、名指されていない概念を含まない。

Une des composantes du signe, l'image acoustique, en constitue le signifiant ; l'autre, le concept, en est le signifié. Entre le signifiant et le signifié, le lien n'est pas arbitraire ; au contraire, il est *nécessaire*. Le concept ( « signifié » ) « bœuf » est forcément identique dans ma conscience à l'ensemble phonique ( « signifiant » ) bœf. Comment en serait-il autrement ? Ensemble les deux ont été imprimés dans mon esprit ; ensemble ils s'évoquent en toute circonstance. Il y a entre eux symbiose si étroite que le concept « bœuf » est comme l'âme de l'image acoustique bœf. L'esprit ne contient pas de formes vides, de concepts innommés.<sup>(9)</sup>

un groupe linguistique) ; nous voulons dire qu'il est immotivé [...] となる。エゲの主張するように、このバンヴェニストの取り違えによって、「言語記号」論文においては『講義』においては意図されていない「記号」と「現実」の関係が持ち込まれていると考えることは可能であるだろう。Cf. Ege, Niels, « Le signe linguistique est arbitraire », *Travaux du Cercle Copenhague*, vol. 4 (1947), p. 15-16. しかしながら、本稿においてはバンヴェニストが錯誤によって見出し、また排除しようとした「第三項」の問題を、ソシュール読解の正当性を巡ってではなく、後年の「代名詞」の問題と結びつけ

て考察する。

(8) *PLG*, 1, p. 49 (邦訳、55頁)。

(9) *Ibid.*, p. 51. 傍点による強調はバンヴェニスト。下線による強調は引用者。

さて以上のようなバンヴェニストの「必然性」の主張においてわれわれはここで二つの点を強調しておこう。第一に、バンヴェニストが『講義』の記述において見いだしたのは「無意識」のうちに持ち込まれた「第三項」としての「現実」であり、そこでの「恣意性」の定義とは「シニフィアン」と「シニフィエ」の関係ではなく、「記号」と「現実」との関係になってしまっていることを彼は強調する。そしてそのような観点——「記号」と「現実」とを関係づけてしまうような観点——こそ、ソシュールが述べる意味での「形式」の学としての言語学が手を切らねばならないものであるとバンヴェニストは述べる。第二に、「記号」の構成の「必然性」を唱える箇所において、バンヴェニストは「精神は空虚な形式や、名指されていない観念を含まない」ということをその根拠にしていることである。ここでバンヴェニストは「形式」という言葉を使っているが、この言葉はここでは「シニフィアン」と同じであると考えてよいだろう。先の引用にあるように、バンヴェニストは「シニフィアン」と「シニフィエ」の紐帯の「必然性」の問題を、「私の意識」、「私の精神」のうちに「記号」を通じて考えている。そして既に「私の意識」にのぼっている「記号」が問題であるならば、精神というのは「空虚な形式」というものを含まないのである以上、その「空虚さ」というのは常に満たされた状態でしか現れることはない。つまりバンヴェニストが問題にしているのは「空虚なシニフィアン」というのは少なくとも「私の意識」においてはありえないということであり、それこそが「必然性」を主張する根拠の一つになっている。このようなバンヴェニストの主張は、「記号」と「現実」との関係である「意義作用」の問題を取り除いた上で、「記号」それ自体の関係を考察する観点によって可能になっているといえるだろう。

## 2-2. 「構造としての遊戯」

さて次に取り上げるのは、バンヴェニストが1947年に『デュカリオン』に発表した「構造としての遊戯」<sup>(10)</sup>という論文（以下「遊戯」論文）である。直接的に言語学的な対象を扱ったものではないこの論文の冒頭において、バンヴェニストは遊戯を「現実」から切り離された「形式」として定義する。遊戯は世界において展開される活動でありながら、その「現実」の条件を考慮せず、諸形式

---

(10) Benveniste, Emile, « Le jeu comme structure », *Deucalion*, vol. 2 (1947), p. 159-167.

の集合であり、「有用性」へと向けられることはなく、その目的は当の遊戯それ自身において見つけ出されるものであるとした上で、バンヴェニストはそのような遊戯の諸特徴はある「閉じた全体性」<sup>(11)</sup>を構築することにあると述べている<sup>(12)</sup>。そしてバンヴェニストは形式と遊戯の問題を考察する中で、ここでもまた、「空虚な」という語句を用いる。

それ〔遊戯：筆者注〕を「形式」と形容することは、現実そのものであるだろう「内容」に遊戯を対立させることである。しかしながら、そこから遊戯は空虚な形式であり、意味を剥ぎ取られた行為の生産であるとは結論づけられない。その構造と合目的性の首尾一貫性は、反対に遊戯の形式に内在しており、あらゆる実践的な目的には常に無関係であるようなある意味を含んでいる […]

Le (jeu) qualifier de « forme », c'est l'opposer à un « contenu » qui serait la réalité même. Mais il ne s'ensuit pas que le jeu soit forme vide, production d'actes dénués de sens. La cohérence de sa structure et sa finalité interne impliquent au contraire un sens qui est comme inhérent à sa forme et toujours étranger à toute visée pratique [...] <sup>(13)</sup>

この「遊戯」論文においてもバンヴェニストはまず遊戯が「現実」から切り離された「形式」であると定義した上で、その遊戯に内的なものとしての「意味」の問題を取り扱おうと試みる。遊戯とは「現実」から切り離されているながらも、決して「空虚な」形式ではない。その内的な「意味」は、遊戯を構造として捉える観点によって把握することが可能になるようなものである。それゆえに、ここで述べられている「意味」とは、記号と「現実」の関係であるような「意義作用」とは区別されなければならない。つまり「言語記号」論文では「シニフィアン」と「シニフィエ」の関係として記述されていたものが、「遊戯」論文においては「意味」として述べられている。

さて「遊戯」論文におけるこのようなバンヴェニストの「空虚」な形式の否定は、「言語記号」論文と同型の議論展開によってなされていることは容易に気づかれるだろう。二つの論文において共に

---

(11) *Ibid.*, p. 161.

(12) ここでバンヴェニストは、「現実」を、「有用性に従属した人間の意志が、至る所で、出来事、脈絡のないもの、恣意的なものにぶつかる」場所として定義している (*Loc.cit.*)。この論文の最後でバンヴェニストが述べる「非現実化としての遊戯」について触れているものとしては以下を参照。Dahlet, Patrick, « Benveniste et l'effusion énonciative de la langue », *Sémiotiques*, n° 10 (1996), p. 99-121. とりわけ115頁以下を参照せよ。この「現実」の問題については、3-3でまた触れるが、「遊戯」論文全体の詳細な読解についてはまた別稿に譲りたい。この論文にお

いて、バンヴェニストは「遊戯」と「参加者」の関係 (本稿3-2参照) を扱い、また「遊戯」をそれ自体一つの固有な「現実」とみなしていることなど、後の彼の代名詞を巡る議論においても重要な問題を提出している。

(13) Benveniste, Emile, *op. cit.*, p. 162. 下線による強調は引用者。

重要になっているのは、形式というものを「現実」から切り離し、その形式に内的な諸関係のみを考察するということである。そして遊戯が「閉じた全体性」を構築すると述べられるとき、「全体性」とはまさにそのような形式に内在する関係性を取り扱うために要請されていると考えられる。このような「全体性」の問題は既に1937年の『インド-ヨーロッパ語における名詞の形成の諸起源』の序文においても取り扱われているが<sup>(14)</sup>、「言語記号」論文においてもバンヴェニストは『講義』において「価値」の問題が取り上げられている箇所を引用し「価値とは実質の属性ではなく、形式の属性としてのみ考慮されるべきである」と述べた後で、バンヴェニストは次のようにその「必然性」を主張する。

そのとき、諸価値は「相対的」と言うことは、それらは互いに相対的であるということの意味する。ところでそれこそがまさに、価値の必然性の証ではないだろうか？ ここで問題になっているのは、もはや孤立した記号ではなく、記号の体系としてのラングであり、ソシユールほど強くラングの体系的な経済を構想し、記述したものはいない。体系というのは、ある構造における諸部分の配列と調和のことを示しており、その構造は構造の諸要素を超越し、それらを説明づけるものである。そこでは全てがまさに必然的であるので、その集合と細部の修正は相互に条件付けられている。

Dès lors dire que les valeurs sont « relatives » signifie qu'elles sont relatives *les unes aux autres*. Or n'est-ce pas là justement la preuve de leur *nécessité*? Il s'agit ici, non plus du signe isolé, mais de la langue comme système de signes et nul n'a aussi fortement que Saussure conçu et décrit l'économie systématique de la langue. Qui dit système dit agencement et convenance des parties en une structure qui transcende et explique ses éléments. Tout y est si nécessaire que les modifications de l'ensemble et du détail s'y conditionnent réciproquement.<sup>(15)</sup>

このようなバンヴェニストの全体と部分の関係についての主張は、いわゆる「構造主義」言語学が

---

(14) Benveniste, Emile, *Origines de la formation des noms en indo-européen*, Paris, Librairie Adrien-Maisonneuve, 1935, p. 2.

(15) *PLG*, 1, p. 54 (邦訳、57-58頁)。強調はバンヴェニスト。

(16) Benveniste, Emile, « Structure en linguistique », in Bastide, Roger (dir.), *Sens et usages du terme structure dans les sciences humaines et sociales*, La Haye, Mouton, repris in *PLG*, 1, p. 91-98 (邦訳、99-107頁)。

提出した重要なテーゼの一つとして広く知られているが、バンヴェニスト自身が後に述べるように<sup>(16)</sup>、ソシュール自身は決して「構造」という語を用いることはなくそこでの問題はむしろ「体系」であった。しかしながら37年の論文において既に「構造」という語が使われているように、ここでバンヴェニストは「構造」という語を「体系」という語の説明のために持ち込んでいるといえる。このような「構造」の定義についてここでは詳述することはできないが、ここではバンヴェニストの「言語記号」論文が収録されている『アクタ・リングイスティカ』の冒頭に置かれた、「構造主義言語学」と題されたヴィーゴ・ブレンダルの論文をみてみよう。そこでブレンダルは、キュヴィエや、同時代の光の「構造」を取り扱う物理学、そしてまた心理学における「ゲシュタルト」の概念を引き合いに出しながら、ソシュールはそのような諸々の研究における「構造」を扱うのと同じ仕方、で「全てが関連しあっている体系」<sup>(17)</sup>について語っていた」と述べ、「構造主義の名の元に既に知られているこの新しい概念」は、「全体性」という観念を問題にしていることとブレンダルは述べる<sup>(18)</sup>。いずれにせよ「全体性」において諸要素は互いに緊密に関係しあい、その「関係」という観点こそがラングを扱うのと同じように遊戯を扱うことを可能にしている。新しい科学としての言語学を目指す「構造主義」言語学<sup>(19)</sup>の潮流において、「閉じた全体性」としての構造という概念が与える定義を、バンヴェニストはここではひとまず受け入れているように思われる。そしてそのような構造は、「第三項」としての「現実」から徹底して切り離されることで対象化されながら、ここまでいかなる「空虚さ」を含まない全体として定義されている。

## 2-3. 「空虚」な音素の現れ

ところが1953年の「動物のコミュニケーションと人間のランゲージュ」<sup>(20)</sup>において、「空虚」という語は「音素」と結びつけられることで、これまでとは異なる仕方、で用いられる。この論文でバンヴェニストは、動物学者のカルル・フォン・フリッシュによって発表された、蜜蜂が仲間、に餌のありかをおしえるための二つのダンスをとりあげて、それは確かにあるコミュニケーションを行っていないながらも、「人間のランゲージュ」との間にはいくつかの差異が存在することを指摘している。

(17) 「全てが関連しあっている体系」という表現自体は、ソシュールの『講義』ではなく、アントワーヌ・メイエの著作に現れていることについては以下の論文を参照せよ。Broganyi, Bela, « A few remarks on the origin of the phrase « système où tout se tient », *Historiographia linguistica*, vol. 10 (1983), p. 143-147. Koerner, Konrad, « Meillet, Saussure et la linguistique générale », *Histoire Épistémologie Langage*, t. 10, fas. 2 (1988), p. 57-73.

(18) Brøndal, Viggo, « Linguistique structurale », *Acta linguistica*, n° 1 (1939), p. 6-7. ここでブレンダルはソシュールに並べて、サビア、トゥルベツコイを「構

造主義」的な言語学者として取り上げている。バンヴェニスト自身も62年の論文においてこのブレンダルの文章について触れながら、当時の構造という観念について言及している。

(19) この言葉を用いることには、もちろん慎重にならなければならない。とりわけ80年代以降クリスチャン・ビュエシュやジャン・リュイ・シス、そしてクロード・ディヌ・ノルマンらは「構造主義言語学」と呼ばれていたものの歴史を辿り直し、詳細にわたり再検討した論文を発表している。Cf. Normand, Claudine, « Une version française du structuralisme linguistique »,



それらの差異は、発生器官の有無や、蜜蜂のダンスが客観的なデータ（餌の場所）のみに関わるものであり、人間のランゲージュの条件である「対話」が存在しないことなどによって示されるが、バンヴェニストが人間のランゲージュと蜜蜂のメッセージとを強く対立させる特徴として取り上げるのは、蜜蜂のメッセージの分析不可能性である。ここでバンヴェニストは、蜜蜂のダンスはその内容を形式的な諸要素、すなわち「形態素」に分解することができないことを主張した上で、次のように述べる。

ランゲージュについてのより徹底した分析は、それらの形態素——意義作用の諸要素——が、今度は諸音素——意義作用を欠いた文節の諸要素であり、より数の少ない諸要素——へと分解されること、それらの音素の選択的であり弁別的な組み合わせがシニフィアンの諸単位を供給することを示す。これらの「空虚な」音素は、諸システムにおいて組織されることで、あらゆるラングの基礎を形成する。蜜蜂のランゲージュが同様な構成要素を分離させないことは明らかであり、それは同定可能で、弁別的な諸要素には帰着しないのである。

Une analyse plus approfondie du langage montre que ces morphèmes, éléments de signification, se résolvent à leur tour en phonèmes, éléments d'articulation dénués de signification, moins nombreux encore, dont l'assemblage sélectif et distinctif fournit les unités significantes. Ces phonèmes « vides », organisés en systèmes, forment la base de toute langue. Il est manifeste que le langage des abeilles ne laisse pas isoler de pareils constituants; il ne se ramène pas à des éléments identifiables et distinctifs.<sup>(21)</sup>

ここでバンヴェニストは、「空虚」という語をギュメにいて用いているがひとまずここではギュメが何を指示しているのかについては考察しないでおう<sup>(22)</sup>。まずもっていえるのは、バンヴェニストの「形態素」と「意義作用を欠いた音素」という用語系は、言語学者アンドレ・マルティネの発表した「言語の二重分節」を念頭に置いていると考えられることである<sup>(23)</sup>。この著名な論文の中

---

LINX, n° 6 (1982), p. 11-75. Chiss, Jean-Louis, et Puech, Christian, « La linguistique structurale, du discours de fondation à l'émergence disciplinaire », *Langages*, n° 120 (1995), p. 106-126.

- (20) Benveniste, Emile, « Communication animale et le langage humain », *Diogène*, n° 1 (1953), repris in *PLG*, 1, p. 56-62 (邦訳, 63-69頁)。雑誌『ディオゲネイア』はロジェ・カイヨワによって創刊されたものであり、バンヴェニストは先の「構造としての遊戯」においてカイヨワについて注の中で触れている。

(21) *Ibid.*, p. 61-62 (邦訳, 68頁)。

(22) バンヴェニストにおけるギュメの使い方の曖昧

さについては、言語学者アントワヌ・キュリオリが指摘している。ここではひとまずギュメの持つ意味は考慮に入れずに進めることにしよう。Cf. Culioli, Antoine, « Theorie du langage et theorie des langues », in Serbat, Guy (dir.), *Emile Benveniste aujourd'hui ; Actes du colloque international du C.N.R.S.*, t.1, Louvain, Editions Peeters, 1984, p.78.

- (23) Martinet, André, « La double articulation linguistique », *Travaux du Cercle linguistique de Copenhague*, vol.5 (1949), p. 30-37. ルイ・イエラムスレウに捧げられたこの雑誌には、バンヴェニストも「ラテン語における前置詞の基論理的システム」という

で、マルティネは人間のランゲージを定義するためにその「分節可能」な特徴に訴えているが、ここでバンヴェニストもそのようなマルティネの定義を引き受けながら、その「意義作用を欠いた」要素を分析のレベルに導入している。「言語記号」論文及び「遊戯」論文においてはある形式というのは常に内容(概念、意味)を備えたものとして捉えられてきたのに対し、ここではそのような内容を備えていない「空虚」なものがラングというシステムの基礎をなすものとして捉えられている。このようなバンヴェニストの「ランゲージについてのより徹底した分析」は、63年に発表された「言語分析の諸レベル」<sup>(24)</sup>において、一つの限界を迎えるといえる<sup>(25)</sup>が、ひとまずバンヴェニストはこれまでは「空虚な」形式というものの存在を認めなかったのに対し、53年には人間のランゲージの分析によってそのような「空虚さ」がラングのなかに見いだされることを主張していることがここでは確認できる。

## 2-4. 「代名詞の性質」における「空虚な」記号の登場

1956年に発表した「代名詞」論文において、バンヴェニストは人称と動詞形という観点において既に取り上げていた<sup>(26)</sup>〈わたし〉、〈あなた〉という人称代名詞、そして〈いま〉、〈ここ〉、〈それ〉など副詞や指示代名詞として用いられるものも含めた「指呼詞」を「ディスクールの審級＝事例」<sup>(27)</sup>の問題と結びつけて論じる。さてここで重要なことは、そのような代名詞もしくは指呼詞という記号が、客観的な「現実」にも、ある恒常的な「概念」にも結びつけられていないというバンヴェニストの規定である。バンヴェニストは論文の冒頭で、〈わたし〉、〈あなた〉という人称代名詞を取り上げ、「語彙的な観念を思考するある名詞」との間には単に形態－統辞論的な構造に関する差異だけではなく、「より一般的で、深遠な性質」を有し、「言語学的な言表行為の過程そのものに関わる」差異が存在すると述べる<sup>(28)</sup>。人称代名詞のもつ特性の一つは、「名詞の個々の使用の「審級＝事例」が、潜在的なままであるかもしくはある個別の対象に現動化する、ある恒常的で「客観的な」観念を指向する」のに対し、代名詞は「ディスクールの現実」<sup>(29)</sup>、そのような代名詞を現に含んでいるそのたびごとに唯一で個別な「ディスクールの審級＝事例」のみを指向する点にあるとバンヴェニスト

---

論文を発表している。Benveniste, Emile « Le système sublogique des prépositions en latin », *Travaux du Cercle linguistique de Copenhague*, vol. 5 (1949), repris in *PLG*, 1, p. 132-139.

(24) Benveniste, Emile, « Les niveaux de l'analyse linguistique », in Lunt, Horace Gray (dir.), *Proceedings of the ninth international congress of linguists*, La Haye, Mouton, 1964, repris in *PLG*, 1, p. 119-131 (邦訳、129-142頁)。

(25) そこでバンヴェニストは、アメリカの言語学者ゼリグ・ハリスの分布主義的な「線分分割」と「代入」という方法論、そしてまたパートランド・ラッセルの

命題関数の理論に依拠しながら、ラングを音素、形態素、語という諸レベルによって形成される階層構造として定義する。バンヴェニストはここでは命題関数を、上位階層への「組み込み作用(intégrant)」のモデル(これをバンヴェニストは「意味」呼ぶ)として捉えており、逆に下位階層への分解は、ここでは「構成要素(constituant)」への還元という操作によって定義づけられる。このようにして一方は上位階層へ向かい、他方は下位階層へ向かう二つの操作をバンヴェニストはここで提示しているのだが、そのような操作は二つのリミットを持っている。下位のリミットとしての音素(細微音素 *mèrisme*)

は主張する。そしてバンヴェニストは、そのような代名詞をここで「空虚な記号」として定義する。

ランゲージュ<sup>(30)</sup>は、諸々の「空虚な」記号の集合を創り出すことでこの問題〔間主観的なコミュニケーションという問題：筆者注〕を解決した。そのような「空虚な」記号は、「現実」に関しては指向性を持たず、常に待機の状態にあり、ある話者が自らのディスクールのそれぞれの審級＝事例においてそれを引き受けるやいなや「実」になる。物質的な指向が欠けているために、それらの記号は誤って用いられ得ず、何も断定しない。それらの記号は真理条件のもとにおかれておらず、あらゆる否定を免れる。

Le langage a résolu ce problème en créant un ensemble de signes « vides », non référentiels par rapport à la « réalité », toujours disponibles, et qui deviennent « pleins » dès qu'un locuteur les assume dans chaque instance de son discours. Dépourvus de référence matérielle, ils ne peuvent pas être mal employés ; n'assertant rien, ils ne sont pas soumis à la condition de vérité et échappent à toute dénégarion.<sup>(31)</sup>

先の「動物のコミュニケーションと人間のランゲージュ」においては「音素」に結びつけられて用いられていた「空虚な」という属性が、ここでは「代名詞」に結びつけられ、それは「現実」への指向性を有していない記号の特性を示すために用いられている。そして、このようにして「代名詞」に結びつけられた「空虚な」という用語を、バンヴェニストは「ディスクールの審級＝事例」の問題を論じる際に、その後も繰り返し用いている。例えば1957年の「ランゲージュにおける主体性について」では、

ランゲージュはいわば「空虚」な形式を提供する。めいめいの話者はディスクール行使においてそのような「空虚」な形式を自らのものとし、自らを〈わたし〉として定義すると同時に、相手を〈あなた〉として定義することで、自らの人称に「空虚」な形式を結びつける

---

と上位のリミットとしての文である。そして文を最後として言語学は「ディスクール」という領域に入り込むことになる。

- (26) Benveniste, Emile, « Structure des relations de personne dans le verbe », *Bulletin de la Société de Linguistique*, 43, fasc. 1, n° 126 (1946), repris in *PLG*, 1, p. 225-236 (邦訳, 203-216頁)。また *Bulletin de la Société de Linguistique* は以下 *BSL* と省略し、続けて巻を記載する。

- (27) 本稿では instance de discours の訳語として「ディスクールの審級＝事例」という訳語を用いる。この instance という語をバンヴェニストがいかなる意味

で導入したのかを確定することは難しいが、ここでは法学的な用語系と論理学的な用語系の二つの意味が重ね合わされているものとして解釈したい。この用語の登場と主体性の問題をフロイト、精神分析との関係から考察しているものについては、小野文「フロイトの読者、バンヴェニスト」(*『Résonances』* 第3号、2002年、142-149頁)を参照せよ。ただしここで小野は、その語が精神分析からとられたと確言することは難しいとしている(同論文註34参照)。また註(25)においてバンヴェニストとラッセルの関係については述べたが、後にも触れるように、バンヴェニストはこの時代に論理学へ関心を向けてお

Le langage propose en quelque sorte des formes « vides » que chaque locuteur en exercice de discours s'approprie et qu'il rapporte à sa « personne », définissant en même temps lui-même comme *je* et un partenaire comme *tu*.<sup>(32)</sup>

と書いており、また1965年の「ランゲージュと人間の経験」においては、

[...] 実際のディスクールの外では、代名詞は空虚な形式でしかなく、それは対象にも概念にもつなぎとめられていない。代名詞はただディスクールによって、その現実と実体を受け取るのである

[...] hors du discours effectif, le pronom n'est qu'une forme vide, qui ne peut être attachée ni à un objet ni à un concept. Il reçoit sa réalité et sa substance du discours seul.<sup>(33)</sup>

とバンヴェニストは述べている。

さてこれまで確認したのは、39年の論文、そして47年の論文においては「空虚な形式は存在しない」といわれていたのに対し、53年、56年、57年、65年の論文においては「空虚な」形式、記号を、とりわけ「代名詞」の問題と関わる場面においてバンヴェニストが認めている点である。このようなバンヴェニストの記述における「空虚な」記号の現れとは、どのような視座の変更を示しているのだろうか。以下その問題を、まず50年代のバンヴェニストにおける「意義作用(signification)」の問題を確認した上で、ついでそれと結びつけられた「話者(locuteur)」の問題を取り上げながら検討してみよう。

### 3. 「意義作用」、「話者」、「現実」と「空虚な」記号

#### 3-1. バンヴェニストにおける「意義作用」の問題

さて56年の「代名詞」論文以降における「空虚な」という語の現れは、「意義作用」の問題と結びつ

り、その影響としてinstanceという語を用いている可能性も否定できない。それゆえ、本稿ではそれら二つの解釈をinstanceという訳語に反映させるために、「審級＝事例」という訳語を用いることにする。同時代の分析哲学の動向と比較しながらバンヴェニストの代名詞論を取り上げているものとしては以下のものがある。Perret, Michèle, « Benveniste et la « token-réflexivité » », in Anis, Jacques, et Eskénazi, André, et Jeandillou, Jean-François (dir.), *Le signe et la lettre ; en hommage à Michel Arrivé*, Paris, Harmattan, 2002, p. 411-418. この論文においてペレもまた「代名詞」論文、「ランゲージュにお

ける主体性」、「ランゲージュと人間の経験」における「空虚な」という語の現れに注目しているが、本稿においてはペレの提出する同時代の代名詞論の比較ではなく、バンヴェニストの内在的な読解のみに留めることにする。

(28) *PLG*, 1, p. 252 (邦訳、235頁)。

(29) *Loc. cit.*

(30) 先の引用と同様に、ここでもバンヴェニストは「空虚な」記号を「ランゲージュ」という語彙と結びつけて用いる。続く引用でもそれは確認されるが、50年代のバンヴェニストは「ランゲージュ」という語を「システムとしてのラング」と「行使におけるラン

いていることをまず検討してみよう。ここで「言語記号」論文に戻るならば、バンヴェニストはそこで「恣意性」——記号と「現実」のものの関係としての恣意性——は「意義作用」について正しいが、「記号」にとっては当てはまらないとしていた<sup>(34)</sup>。つまりここで「意義作用」は、バンヴェニストが『講義』の中に見いだした「第三項」の侵入、記号と「現実」の事物との関係を示しているといえる。そしてバンヴェニストにおける「必然性」の主張とはそのような関係を捨象し、記号内的な関係のみを取り上げることで可能になっていたことは既に確認した。しかしながら、53年の「一般言語学の最近の傾向」においては、バンヴェニストはこの「意義作用」を再びとりあげて問題にする。

言語学者にとってと同じように、話すもののナイーブな感覚からすれば、ランゲージュは「何かをいう」という機能をもっている。ランゲージュがそのために分節されるこの「何か」とは正確には何であり、ランゲージュそれ自身との関係でその「何か」をいかにして画定するのか？ 意義作用の問題が提起されているのである。

Au sentiment naïf du parlant comme pour le linguiste, le langage a pour fonction de « dire quelque chose ». Qu'est exactement ce « quelque chose » en vue de quoi le langage est articulé, et comment le délimiter par rapport au langage lui-même ? Le problème de la signification est posé.<sup>(35)</sup>

バンヴェニストは、レナード・ブルームフィールドやゼリグ・ハリスといった同時代のアメリカの言語学者はそのような「意義作用」を問題にせず、技術的な操作によって分析をはじめていることを指摘した上で、「行動主義」的な立場からなされる言語分析の手続きに疑念を挟み込んでいる。バンヴェニストにとってそのような仕方ではなされる分析は、単に言表を要素に分解することであり、それ自体は決してラングの分析ではない。上の引用にあるとおり、バンヴェニストは「意義作用」の問題を捨象せず、むしろそれこそをラングの分析の条件と考えようとする。そのような「意義作用」とラングの問題に触れながら、バンヴェニストは次のように述べる。

グ」という二重の意味において用いているように思われる。ここでバンヴェニストがいかなる意味において「ランゲージュ」と「空虚な記号」を結びつけているのかについてはまた稿を改めて論じなければならないだろう。このバンヴェニストにおける「ランゲージュ」と「ラング」という用語の曖昧さについて、キュリオリは先の論文で言及している。Cf. Culioli, Antoine, *op. cit.* また同様に以下の論文でもバンヴェニストにおけるランゲージュを巡る曖昧さは指摘されている。Tamba-Mecz, Irène, « A propos de la distinction entre 'semiotique' et 'sémantique' chez E. Benveniste », in Serbat, Guy

(dir.), *Emile Benveniste aujourd'hui ; Actes du colloque international du C.N.R.S.*, t. 1, Editions Peeters, Louvain, 1984, p. 187-197. また小野文は、「ランゲージュ」と「諸言語」を巡る「一般性」の問題を、ソシュールの読解におけるバンヴェニストのラングからランゲージュへの読替えの中に見いだしている(小野文「不安の継承——ソシュールとバンヴェニスト」『思想』第11号、2007、162-178頁)。

(31) *PLG*, 1, p. 254 (邦訳、237頁)。強調は引用者。

(32) Benveniste, Emile, « Subjectivité dans le langage », *Journal de Psychologie normale et pathologique*, vol. 55, n° 3 (1958), repris in *PLG*, 1, p. 263 (邦訳、

それゆえいくつかのタイプの記述と形式化を構想することができるが、それらの全ては必然的にその対象—ラング—が意義作用によって形を与えられていること、そしてまさにそれによって、対象は構造化されていることを前提としなければならない。

On peut donc concevoir plusieurs types de description et plusieurs types de formalisation, mais toutes doivent nécessairement supposer que leur objet, la langue, est informé de signification, que c'est par là qu'il est structuré.<sup>(36)</sup>

ここにおいてバンヴェニストは明らかに、「言語記号」論文において「空虚」な形式を含まないものとして、また全てが「必然的に」相互に支え合っているものとして考えていたラングの問題を違う仕方で見えようとしているだろう。なぜならそのような「必然性」の主張とは、「意義作用」というものを排除すること、つまり「第三項としての現実」の問題から身をひくことで可能であったのに対し、ここではむしろそのような「意義作用」こそラングの分析における前提とされているからである。ではそのときに、以上のような「意義作用」の問題が「話者」の問題とどのように関わるのか。次節ではその点について検討していこう。

### 3-2. 「代名詞の性質」における「話者」の問題

さてわれわれはここで、「意義作用」の問題が「話すもののナイーブな感覚」という観点と併せてバンヴェニストによって導入されていたことを思い返そう。「言語記号」論文において、「話し手」とっては、ラングと現実の間には完全な一致があるつまり記号は現実を覆いそして操作する。さらにいえば、記号はこの現実である<sup>(37)</sup>と述べられているように、「話し手」とっては、記号と「現実」というものの間にそもそも差異は存在しないとされていた。そして言語学者と「話し手」の観点的違いは、このような記号と「現実」の間の差異を認めることができるのか否かによっているといっても過言ではない。しかしながら、先の引用にもあるように、バンヴェニストは53年の論文において言語学者と「話すもの」の感覚という二つの立場を並列しながら、「意義作用」をそれらに共通

---

248頁)。以下、*Journal de Psychologie normale et pathologique* はJPと省略する。

- (33) Benveniste, Emile, « Langage et l'expérience humaine », *Diogène*, n° 51 (1965), repris in *Problèmes de la linguistique générale*, 2, Paris, Gallimard, 1974, p. 68. 以下、*Problèmes de la linguistique générale*, 2は、PLG, 2と表記する。

- (34) PLG, 1., p. 53 (邦訳、60頁)。

- (35) Benveniste, Emile, « Tendances récentes en linguistique générale », *JP*, vol. 54 (1954), repris in *PLG*, 1, p. 7 (邦訳、8頁)。またバンヴェニストにおける「意義作用」の問題を扱った論文と

しては以下のものがある。Normand, Claudine, « Benveniste : une linguistique saussurienne de la signification », *LINX*, n° 26 (1992), p. 49-75. この論文においてノルマンは「意義作用」という用語がバンヴェニストにおいて孕んでいる曖昧さを指摘している。とりわけ70-71頁を参照。

- (36) PLG, 1, p. 12 (邦訳、13頁)。

- (37) *Ibid.*, p. 52 (邦訳、59頁)。

の問題として設定していた。

ところで、バンヴェニストの40年代後半から50年代の論文において、「話し手」というのは比較言語学に属するような仕事においても常に重要な問題になっているという事実、そしてそのような考察における「内」と「外」という問題が、主語=主体を巡る問題としてもまた捉えられていることは既に指摘されている<sup>(38)</sup>。そのような論考においては、これまでの言語学が「話し手」や「対象」、「過程」といった言語外の観念に訴えることで説明づけてきた諸問題を、「システムにおける対立」という言語学的な方法論によって再検討することがバンヴェニストにとっての主題であったといえる。例えば動詞の態を巡る1950年の「動詞における能動態と中動態」において、バンヴェニストはその問題を「対立」という「純粋に言語学的な基準」に基づいて検討することを試み、「過程における主体の「利害関心」という「言語外的」な観念に訴えることから身を守ろうとする<sup>(39)</sup>。「曖昧で」「言語外的な」なものととしてバンヴェニストの目に映っている「話し手」の問題に結びつけられてきた「態」<sup>(40)</sup>や、「対象」と「過程」という「客観的な現実」を前提として構成される基準に照らし合わせて行われてきた「名詞」と「動詞」というカテゴリーの問い直しは<sup>(41)</sup>、同時に「意義作用」や「話し手」を巡る問題の再設定にもまた関連しているといえるだろう。

そして「代名詞」論文において問い直されているのは、まさに上で確認したような「話し手」であることは次の一節からも明らかである。バンヴェニストは一連の指呼詞、〈いま〉〈ここ〉などの表現を取り上げ、

この一群の表現全体[指呼詞、〈いま〉〈ここ〉などを含む表現；筆者注]に暗に含まれている「話し手」への指向は、いままであまりにも軽く、そして自明なものとして扱われてきた。しかしこの指向が他の言語記号から区別されるそもそもの特徴を見分けるのでなければ、それら固有の意義作用から、その指向を奪い去ってしまうことになる。

On a traité trop légèrement et comme allant de soi la référence au « sujet parlant » implicite dans tout ce groupe d'expressions. On dépouille de sa signification propre cette référence si l'on ne discerne pas

---

(38) Cf. Normand, Claudine, « Les termes de l'énonciation de Benveniste », *Histoire Épistémologie Langage*, t. 8, fasc. 2 (1986), p. 191-206. (とりわけp. 193 及びp. 203.) ; 小野文「『ランゲージにおける主体性』を巡る二つの発話行為論——シャルル・バイイとエミール・バンヴェニスト」『*Résonances*』、2003、94-101頁。同論文の3章、4章においては、以上のような問題が「主体性」の問題といかに結ばれているのが検討されている。

(39) Benveniste, Emile, « Actif et moyen dans le verbe », *JP*, vol. 47 (1950), repris in *PLG*, 1, p. 168-175 (邦訳、165-173頁)。

(40) Benveniste, Emile, « Compte rendu de l'ouvrage de Cahntraine, Pierre (1945), *Morphologie historique du grec*, Klincksieck », *BSL*, 43, fasc. 2 (1946), p. 38-39.

(41) Benveniste, Emile, « La phrase nominale », *BSL*, 46, fasc. 1 (1950), repris in *PLG*, 1, p. 151-167 (邦訳、145-164頁)。



と述べながら、「話し手」という曖昧な対象へと結びつけられてきた指呼詞を、「ディスクールの審級=事例」における「話者」の問題へと結びつけて記述する<sup>(43)</sup>。ここで重要なのは、パンヴェニストが「話し手」と「話者」という二つの言葉を区別した仕方を用い始めていることだ。上の引用に続いて、パンヴェニストは「そのような「空虚な」記号は、「現実」に関しては指向性を持たず、常に待機の状態にあり、ある話者が自らのディスクールのそれぞれの審級=事例においてその「空虚な」記号を引き受けるやいなや「実」になる<sup>(44)</sup>と述べているのだが、ここでパンヴェニストは「話し手 (sujet parlant)」ではなく「話者 (locuteur)」という語を用いる。また既に引用した箇所でも、「空虚な」という語を用いるとき、パンヴェニストは「話者」という語をそのような記号と結びつけて用いていることもその二つの用語の使用が「空虚な」記号を巡って使い分けられていることを示唆しているといえるだろう。つまりパンヴェニストにとって、「話し手」と「話者」の間にはある差異が存在する。「空虚な」記号を「自らのものに (s'approprier)」し、それを「実」にするのは「話者」であり、「話し手」とこれまでよんできたのは既にそのような「空虚な」記号というのを想定せずにラングを自らのものに行っているものであるといえる。そしてそのような「話者」は、「話し手」との対比から考えるならば、「言語外的」なものではなく、「代名詞」それ自体の性質を分析した結果として、「言語内的」に析出されるものであるといえるだろう。このような存在としての「話者」は、実際、「遊戯」論文において既に予見されていた。そこでパンヴェニストは遊戯とその参加者との関係を記述しながら、参加者の唯一の機能は「遊戯が現実化 (se réaliser) することを可能にする」ことにありと述べ、「遊戯こそがプレイヤーを決定するのであり、その反対ではない。遊戯はその行為者を創造し、行為者に場所、地位、姿形を付与する」と規定する<sup>(45)</sup>。このような遊戯と参加者の間の関係は、ここでは「話者」とラングとの間の関係と相同的であり、それゆえそのような「空虚な」形式こそが「話者」を作り出すといえるだろう。「話者」と「話し手」を分離することで、「意義作用」の問題は「話者」の「空虚な」記号の所有として、言い換えるならば「空虚な」記号が「実」

(42) *PLG*, 1, p. 254 (邦訳, 237頁)。

(43) 「空虚な」記号としてパンヴェニストは代名詞〈わたし〉〈あなた〉だけでなく、〈いま〉〈ここ〉といった指呼詞全体を考えているように思われるが、しかしながらラングの現動化においては代名詞〈わたし〉〈あなた〉がその中心に置かれていることは明らかである。

(44) 下線による強調は引用者。

(45) Benveniste, Emile, « Le jeu comme structure », *op. cit.*, p. 162. また1948年にパンヴェニストは、『インド-ヨーロッパ語における動作主名詞と行為者名詞』を出版しているが、ここでパンヴェ

ニストは現代フランス語における接尾辞 *-(t)eur* についても扱っている。この論文が、広い意味での「行為」を扱っている点は「遊戯」論文また後のパンヴェニストにおける行為の問題、「話者 (locuteur)」の接尾語を考える上で重要だと思われるが、その点についてはここでは深入りできない。Cf. Benveniste, Emile, *Noms d'agent et noms d'action en indo-européen*, Paris, Adrien-Maisonneuve, 1948, p. 60-61.



記号になるラングの現動化の関係として再定義される。

だがそのときに、なぜここで「空虚な」記号をバンヴェニストはここで認めうるのだろうか。いかえるならば、なぜバンヴェニストは「言語記号」論文においてはそのような「話者」を認めることができなかったのだろうか。ここで問題になるのは、「言語記号」論文、「遊戯」論文では「形式」と対立させられていた「現実」の地位である。次節では、「代名詞」論文において「空虚な」記号が、「ディスクールの現実」と関係づけられることによって、以上のような「話者」と「意義作用」の問題の再定義が行われたことを確認しよう。

### 3-3. 「ディスクールの現実」と「空虚な」記号

さて「代名詞」論文以降における「空虚な」という語の現れは「ラングのディスクールへの現動化(actualisation)の過程」という問題と結びついていることを再び確認しよう。既に上で引用したように、「話者」は「空虚な」記号を「自らのものにする」ということによって、ラング全体を「自らのものにし」、「そのたびごとに唯一のディスクールの審級=事例」を現動化する。そしてバンヴェニストは、そのような「ディスクールの審級=事例」を、「ディスクールの現実」といいかえ、代名詞〈わたし〉とは、客観的な「現実」に対して指向性を持たないがゆえに、「ディスクールの現実」そのものを指向すると述べている<sup>(46)</sup>。

ところでバンヴェニストは「現動化」について述べるさいに、一貫して「自らのものにする」という表現を用いているが、そこでバンヴェニストは「話し手」の精神や意識をその原因とは考えていないといえる。このことは例えば、バンヴェニストが「ランガージュにおける主体性」論文を発表した「心理学雑誌」に収録されている『「言語意識」という観念について」という論文<sup>(47)</sup>では、現動化の問題<sup>(48)</sup>が「意識によってなされる」ものであり、「言語意識は現動化するという機能を持つ」<sup>(49)</sup>と述べられていることと比較すればその対比が明らかになるだろう。バンヴェニストは53年の論文において、既に言語学の心理学への依存関係からの脱却について述べているが、このようにいうことでバンヴェニストが意図しているのは言語学と形式的な学との関係であるといえる。バンヴェ

(46) *PLG*, 1, p. 252 (邦訳, 235頁)。このことをバンヴェニストは代名詞の「自己指向的(sui-référentiel)」な特徴と規定する。

(47) Mirambel, André, « Sur la notion de « conscience linguistique » », *JP*, vol. 55, n° 3 (1958), p. 266-301.

(48) このような現動化の問題が、バンヴェニスト以前に既にシャルル・バイイや、ギュスターヴ・ギョームらによって取り扱われており、バンヴェニストが彼らの緒論に触れていないことについての批判はなされている。Cf. Barbréris, Jeanne-Marie, et Bres, Jacques, et Siblot, Paul (dir.), *De l'actualisation*, Paris, CNRS Editions, 2008. と

りわけその第一部は言語学に於ける現動化を巡る歴史的展開を扱っている。

(49) Mirambel, André, *op. cit.*, p. 284.

ニストは同論文で、言語学と論理学の関係についてルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインやバートランド・ラッセルに触れながら言及し、また先に触れたように62年の論文においては明示的にラッセルの命題関数を援用しながら、階層構造としてラングの分析を行うが、実際「代名詞」論文においても、そのような論理学への接近は既に見受けられる。バンヴェニストは1971年の論文「言表行為の形式装置」においては、「ラングを用いる個人的行為は、話者をまず変数として導入する」と述べているが、ここで「変数」と呼ばれているものはこれまで述べてきた「空虚な」記号であると考えられる。そしてそれを「変数」と読み替えているときに、バンヴェニストはラッセルの命題関数を既に理論的な参照元として考えていた可能性がある<sup>(50)</sup>。そのことは先の引用における「それらの記号は誤って用いられ得ず、何も断定しない。それらの記号は真理条件のもとになく、あらゆる否定を免れる」という箇所で「真理条件」という語彙が用いられている点、また「指向性」や「事例(instance)」という用語が用いられている点からも示唆されうる。その場合には、「空虚な」という用語によって、バンヴェニストは変数を持つ関数としてラングを形式化しようとしていたといえるだろう。

以上のような心理学と論理学との関係を一瞥した上で、とにかくバンヴェニストが「ディスクールの審級=事例」を導入しそれを「ディスクールの現実」と言い換えながら持ち込むのは、これまでは慎重に排除されてきた「第三項」としての「現実」、つまり「意義作用」の対象としての「現実」であるといえる。しかしながらそのような「ディスクールの現実」とは、言語外にその対象を持つものでもなく、また「話し手」のうちで心理的な現動化によって構築されるものでもなく、ただ代名詞という「空虚な」記号の振る舞いそれ自体を観察することで捕捉可能になるような「現実」である。そしてバンヴェニストがそのような記述を行いうるのは「意義作用」の結果としてのラング、「ディスクールの事例=審級」から開始してのみであり、そのような経験的なデータにおける「代名詞」とはまずもって現動化の印として捉えられている。

〈わたし〉と〈あなた〉という指呼詞は、潜在的な記号としては存在することができない。それ

---

(50) Benveniste, Emile, « L'appareil formel de l'énonciation », *Langage*, n°17 (1970), repris in *PLG*, 2, p. 79-88. 81頁でバンヴェニストは「ラングを用いる個人的行為は、まず、言表行為に必然的な諸条件における変数として話者を導入する」と述べている。またノルマンは「空虚な」記号を明示的に命題関数と置き換えて記述している。Cf. Normand, Claudine, « Emile Benveniste : quelle sémantique ? », *Linx*, vol. 8 (1996), p. 226.

らの記号は、ディスクールの審級＝事例において現動化されることでしか存在しない。ディスクールの審級＝事例において、それらの記号はその固有な審級＝事例のおのおのを通じて、話者による専有の過程を印しづけている。

Ainsi les indicateurs *je* et *tu* ne peuvent exister comme signes virtuels, ils n'existent qu'en tant qu'ils sont actualisés dans l'instance de discours, où ils marquent par chacune de leurs propres instances le procès d'appropriation par le locuteur.<sup>(51)</sup>

〈わたし〉や〈あなた〉は潜在的な記号としては存在し得ないにも関わらず、現動化されたディスクールの審級＝事例においては現動化の過程の印としてあるというこの記述は、まさにバンヴェニストが述べていたような、「意義作用によって構造化されているラング」の過程そのものを分析することを可能にするものとして、彼が「代名詞」を捉えていたことを示しているだろう。以上のような検討を通じて、バンヴェニストが「言語記号」論文において「空虚な形式」を含まないものとしてラングを考えていたのであれば、それはラングを「自分のものにした」——「代名詞」を含む全ての記号が「実」となっている——結果としてのみ考えていたのであるということが確認される。そのときに、バンヴェニストはここで「ディスクールの審級＝事例」と名指されているものを「暗黙のうちにラングと同一化する」という、後にバンヴェニスト自身が注意を払う誤りを犯していたといえるかもしれない<sup>(52)</sup>。さらにいうならば、バンヴェニストは「話し手の精神」という「第三項」を密かに導入し前提とすることで、「空虚な」記号を含まないラングの「必然性」を主張することができていたともいえるかもしれない。「必然性」を主張するさいに「私の意識」や「私の精神」と述べられていた、その「私の」という所有形容詞とはいったい誰のことなのか。バンヴェニストが「空虚な」記号をラングのうちに認めるとき、今やそのような〈わたし〉は前提ではなく、「空虚な」記号が「実」記号になるというそのような過程として再度記述され直し、「ディスクールの審級＝事例」を可能にする「話者」として、代名詞の性質そのものを通じて定義され直す。その過程とは現動化の別名であり、「空虚な」記号が「実」記号になるというその変容を説明するために導入される

---

(51) *PLG*, 1, p. 255 (邦訳、238頁)。下線による強調は引用者。

(52) *Ibid.*, p. 11 (邦訳、12頁)。

ものである。また「言語記号」論文において「意義作用」の対象としての「現実」が、排除されるべき「第三項」として捉えられていたとき、そこでは「記号」と「現実」という対立が措定されていたのに対し、ここでは、「空虚な」記号を含むラング、「ディスクールの現実」、「現実」といういわば三項の関係によって、言語学の対象が記述され直しているともいえるだろう。以上のようなバンヴェニストの困難な定式化は次のように要約できる。つまり一度彼が捨象した「意義作用」の問題を、もう一度ラングの問題の中心に、しかも「話し手」という言語外の観念に訴えることなく置き直すこと。このような要請に基づきながら、バンヴェニストは「空虚な」記号として代名詞を定義することで、「話者」という「話し手」とは区別された「ディスクールの審級＝事例」においてのみ記述できる言語内的な存在を自らの分析のなかに導入し、それと同時に「ディスクールの現実」という代名詞の「意義作用」の対象を持ち込みながら、ラングと「現実」との関係を三項関係にした。それは「空虚な」部分を含まない「閉じた全体性」としての構造を、「話者」がラング全体を「自らのものにする」という「意義作用」によって「構造化された」結果として、そのような「空虚な」部分が満たされたものとして捉え直すことで可能になったといえるだろう<sup>(53)</sup>。そして以上のような考察において、「空虚な」記号というのは、いわば未だ誰のものにもなっていないラングにのみ含まれるものであり、決してディスクールと混同されることのないラングの状態として考えられる。

#### 4. 結論

ここまでわれわれはバンヴェニストにおける「空虚な」という語句に注目し考察を行ってきた。まず、バンヴェニストにおける「空虚な」という用語の使用は、「言語記号」論文においては「私の意識」、「私の精神」と結ばれ、また「遊戯」論文においては「閉じた全体性」と結ばれていることによって、それらの論文においては「空虚な」部分を含まないシステム（もしくは構造）が論じられていることを指摘した。しかしながらバンヴェニストが代名詞もしくは「ディスクールの審級＝事例」を問題にする50年代の論文においては、「空虚な」記号こそがシステムの現動化を可能にするもの

---

(53) 現動化されたラングが「全体性」をそなえた構造として現れることは、バンヴェニストが「代名詞」論文及び「主体性」論文でしばしば「ランゲージュ全体(le langage entier)」、「ラング全体(la langue entière)」を「自分のものにする」という表現を用いていることによって確認されるといえる。

(54) このようにして「話し手」という存在を言語外のものとし、「話者」をディスクールの審級＝事例において見出される言語内的なものとするバンヴェニストの視点は、後に哲学者ポール・リクールがバンヴェニストの緒論を取り入れながらも、構造主義を「超越論的主観性なきカント主義」と呼びながら批判したことに当てはまるように思われる。

つまりリクールはあくまでバンヴェニストにおける「話し手」の存在を要求しているといえるだろう(Ricœur, Paul, « La question du sujet : le défi de la sémiologie », in *Le conflit des interprétations essais d'herméneutique*, Paris, Edition du Seuil, 1969, p.252.)。バンヴェニストとリクールを巡っては以下を参照。Ono, Aya, « Le parcours du sens : Ricœur et Benveniste », *Semiotica*, 168 (2008), p.325-339. バンヴェニストが「言語外」の現実を問題にする姿勢は、例えばヤコブソンが同じように代名詞〈わたし〉を問題にするときにフッサールを引き合いに出すのに対し、おそらくそのような現象学的な基礎付けを拒否する姿勢としてもまた考察しなければなら

として捉えられており、そのようなバンヴェニストの議論の変化を、一方では50年代のバンヴェニストにおける「意義作用」の問題の再検討を通じて、また他方ではそれと関連して、「話し手」というものを前提とすることなくラングを分析するための方法として考察してきた。そこで確認されたのは「空虚な」記号と「実」記号の差異こそが現動化の過程を問題にすることを可能にしているという点であり、「空虚な」記号を含むラングは「話し手」という存在へのア・プリオリな指向を中斷することによってのみ見いだされるということであった<sup>(54)</sup>。またそこでは「ディスクールの現実」という「意義作用」の対象、言語学的な「現実」が導入されていることをみてきた。おそらくここにおいて、「言語記号の性質」と「代名詞の性質」という二つの論文のタイトルの相同性、つまり「性質」という言葉の使用は、このようなバンヴェニストにおける「記号」の問題の再定式化を示すものとしても考えられるだろう。

最後に以下の二つの点を問題として提出したい。現動化を説明するさいに71年の「言表行為」論文まで絶えず用いている「自らのものにする」という表現は、後の「ラングの構造と社会の構造」においても、「社会階級」の問題と結びつけられて用いられているが<sup>(55)</sup>、このバンヴェニストの用語の選択は代名詞の問題が単にラングの現動化だけではなく、それがラングと社会、所有と交換という一連の問題へと繋がっていることを示唆しているように思われる。実際、例えばバイイやギョームといった現動化の問題についての先駆者と一部の研究者に見られるものたち、また同時代のロマーン・ヤーコブソンにおける代名詞の扱いを巡るその大きな違いとは、この「自らのものにする」という特異な表現にバンヴェニストが固執している点にあるともいえる<sup>(56)</sup>。

また「ディスクールの審級＝事例」については、ほぼ同年に書かれた「精神分析におけることばの機能について」という論文との関係をより慎重に扱う必要があるだろう<sup>(57)</sup>。実際、「ディスクールの現実」に関して、この論文は既に「代名詞」論文とほぼ同型の取り扱いを行っているように思われる。以上のより広範な問題系を巡ってはまた稿を改めて論じなければならないだろう。

らないだろう。

(55) Benveniste, Emile, « Structure de la langue et structure de la société », in *Linguaggi nella società e nella tecnica*, Milano, Edizioni di Comunità, 1970, repris in *PLG*, 2, p. 91-102.

(56) バンヴェニストの代名詞の問題を、高等科学実習院においてほぼ同時代に教えていたアレクサンドル・コジエヴまたはヘーゲルからの影響とみるものもある。Cf. Desson, Gérard, *Emile Benveniste, l'invention du discours*, Paris, Editions in Press, 2006 (とりわけ 133-138 頁及び 153-164 頁を参照) ; Milner, Jean-Claude, *Le périple structural*, Paris, Editions Verdier, 2008, p. 121-158.

(57) バンヴェニストも交流のあった精神分析家ジャック・ラカンがほぼ同時代に発表した「ローマ講演」において「空虚な」という形容詞はパロールと結びつけられて用いられている。バンヴェニストの論文の中でラカンへの言及が自らの言語理論との関係において語られる場面は限られているが、そのような交流がどのレベルに及んでいるのか検討する作業は今回扱った「空虚な」という形容詞についてより考察するために必要であるだろう。精神分析とバンヴェニストの関係については、前掲の小野文「フロイトの読者、バンヴェニスト」を参照。